

現職教育計画

1. 学校教育目標

感動と創造の教育

～夢をもって生きる子どもたち～

2. 研究主題

「自力解決力のある子どもたちの育成」

～「理科」「生活科」におけるPISA型読解力を育成する授業づくり～

3. 主題設定の理由

本校では学校教育目標で示す「夢をもって生きる子どもたちの育成」のため、学校研究での目指す子ども像を「自力解決力のある子」と設定し研究を進めてきた。特に自力解決力育成のために必要な「資質・能力」、「論理的思考力」、「かかわる力」という3つの力の育成に重点を置いて、実践・研究を積み上げてきた。

現在、それらの研究の成果を踏まえ、「PISA型読解力を育成する授業モデル」の実践を研究の柱としてきている。それは、本校が追究してきた「自力解決力」が「PISA型読解力」と一致していると考えられること、また、PISA型読解力を育成する授業モデルを実践していくことで、本校が重点を置いてきた「資質・能力」、「論理的思考力」、「かかわる力」という自力解決力を支える3つの力が総合的に育成されていくと考えられたからである。

理科、生活科を通して子どもたちの自力解決力を育成し、社会の中で夢とその実現への自信をもって生きる子どもたちに育ってほしいと願っている。

4. 研究の構想

(1) めざす子ども像

「自力解決力のある子」

自ら課題を見だし、追究するとともに仲間と交流する中で「生きた知」を創り出していく子

「生きた知」とは

自ら見いだした課題を、自らの力で追究し、その結果獲得された知識で、かつ、他の場面（学習・生活）に生かすことのできるものを「生きた知」と定義する

理科でめざす自力解決力のある子

自然の事物・現象に自ら働きかけ、見通しを持った実験・観察を通して課題を追究し、事象の性質や規則性を実感するとともに、仲間との交流を通して、「生きた知」を創り出していく子

生活科でめざす自力解決力のある子

身近な人々、社会、自然と直接関わることを通して、自分の思いや願いを実現し

ていく中で、人々、社会、自然や自分自身に気づき、その良さを実感するとともに仲間と交流しながら自分の生活を創り出していく子

(2) 研究の重点

自力解決力の育成、特に、熟考・評価のプロセスの深まりを意識して、今年度の研究の重点を理科、生活科においてそれぞれ設定した。

理科の重点①

問題解決学習の過程（特に「熟考・評価」場面）において、得られた知を別の視点から見つめ直したり、他の事象に当てはめて再考したりする場面「ほんとかな？」思考場面を持つ

問題解決学習の過程を経て創り上げられた知は、活用されてこそ「生きた知」となる。そこで、学習過程で得られた知をもう一度見つめ直し、「ほかのものにもそのきまりは当てはまるはずだ」など得られた知をさらに深めたり広げたりする場面のある授業・単元を構成する。そうすることで、知は活用されてこそ意味のあるものとなるという意識の高まりや、「熟考・評価」のプロセスの深まりにつながっていくことをねらいとする。

理科の重点②

問題解決的な追究のストーリーを意識させる

追究のストーリーを意識させる手立てるために、以下の2つの手立てを実践する。

ア. 実験結果を考察する時に実験方法まで言及して説明させる

「実験結果はAでした」→「Bという方法で実験をしたら、Aというでした」

※全員が同じ実験方法を行っている場合など、方法にまで言及する必要感がない場合は結果だけの説明もあるものとする

イ. 追究が終わった時に、2つの視点でふりかえりを書かせる

視点①「これまでの追究過程を言葉でまとめましょう」

視点②「もっと分かりたいことやはっきりさせたいことはありますか？理由もあれば書きましょう」

※2つの手立てのメリット

- ・ 追究のストーリーの意識が高まる
- ・ 書かれたふりかえりを分析することで「ほんとかな？」思考の評価ができる（学級全体・個人内・年間を通しての成長、変化を読み取ることができる）

生活科の重点①

「見つける、比べる、たとえる」などの学習活動を充実させる

「見つける、比べる、たとえる」などの多様な学習活動をくりかえすことにより子どもたちの気付きはより明確になったり、共有化され関連づけられたりして「納得ある気付き」「関連づけられた気付き」「自分自身への気付き」へとその質が高められていくと考えている。

また、そのような生活科での「気付きの質の高まり」が、自然認識の力や科学的な見方や考え方といった、理科における自力解決力を支える力につながっていくものと考えている。